

デジタル遺品はどう受け止められるのか : 近親者を亡くした方への調査から(2)

折田明子†

概要: 近親者の死である「二人称の死」では、故人との関係性が途絶するとともに新たな関わり方が生まれることが示唆されている。デジタル遺品に関しては、近親者のデータを遺したいという意向があるものの、データが残る保証はなく、かつその受け止め方は個人によって異なるものでもある。本稿では、2020年～2021年の間に近親者を亡くした国内の20代～70代の男女を対象に、遺されたデータとの扱いと向き合い方について実施した調査について、回帰分析および自由記述を対象とした分析結果を示す。その結果、葬儀に参列しているほどデータを残す傾向にあり、デジタルデータであれば若いほど残す傾向にあった。同居したり葬儀に参列しているほど遺された写真と向き合い、かつ若いほどチャットなどのデータと向き合っていた。自由記述コメントは肯定的なコメントが58.3%、否定的なコメントは6.4%であり、特に関心や思い入れがないものは35.3%であった。その傾向は続柄によって異なり、また故人との関係性によっても異なっていた。ただし、否定的なコメントの中には故人のプライバシーを慮るものもみられた。

キーワード: デジタル遺品, 死者, 遺族, 追悼

How are digital remains perceived by the bereaved family? : From a survey of those who have lost a close relative-2

AKIKO ORITA†

Abstract: It has been suggested that in "death of the second person," which is the death of a close relative, the relationship with the deceased is severed and new ways of relating to the deceased are created. As for digital remains, while there is a desire to preserve data on next of kin, there is no guarantee that the data will remain, and the way in which this is perceived differs from person to person. This paper presents the results of a regression analysis and an open-ended statement analysis of a survey of men and women in their 20s to 70s in Japan who lost a close relative between 2020 and 2021, regarding how they handle and deal with the data left behind. As a result, the more they attended funerals, the more they tended to keep the data, and the younger they were, the more they tended to keep the data if it was digital data. The younger the respondents were, the more they were confronted with the photos left behind and the younger they were, the more they were confronted with the data such as chat rooms. Free-text comments were positive 58.3% of the time and negative 6.4% of the time, and 35.3% of the time there was no particular interest or feeling for the person. The trends varied by succession and by relationship to the deceased. However, some of the negative comments were concerned about the privacy of the deceased.

Keywords: Digital remains, deceased, bereaved, mourning

1. はじめに

個人の死後、一般的な「モノ」としての遺品と同様に写真やメッセージのデジタルデータが遺されるようになった。いわゆる終活においても、自身あるいは親世代のデジタル遺品の扱いについてふれられるようになり[1]、デバイスおよびデバイスに格納されているデータ、ID とパスワードでログインするサービスとそのデータの引き継ぎが意識されつつある[2]。ただし、一身専属性があり相続ができないサービスやデータは引き継ぐことができないおそれがある[3]。一方、2020年以降の新型コロナウイルス感染症の流行によって、死にゆく家族との別れは形を変えている。病院での面会自体が困難となった上、2020年7月に定められたガイドラインにより、新型コロナウイルス感染症による死亡であれば遺体は納体袋に納められ直接火葬をする手順が取られることとなり、遺族が故人と別れの時間を持つことができ

なくなつた[4]。葬儀を行える場合でも、その形態や参列人数は大きく変化した。鎌倉新書が2022年3月にオンラインで実施した調査によれば、コロナ禍前(2020年調査)よりも一般葬は減少し(48.9%から25.9%)、一方で家族葬(40.9%から55.7%)および直葬・火葬(4.9%から11.4%)は増加していた[5]。さらに、平均参列人数は、2017年には64名だったが、2020年に55名、2022年に38名と過去最少であった。

このような状況において、実際に近親者が亡くなった際、どのようなデータやアカウントが残され、そしてそれらに対してどのように対応し、向き合っているのか、そして近親者との距離や遺族の属性はどの程度関係があるのか。本稿では、近親者の死およびデジタル遺品に関する関連研究を整理した上で、2020年～2021年にかけて近親者を亡くした方を対象としたオンライン調査の結果を報告する。なお、本調査の集計およびクロス分析は既に[6]で報告済みであり、

† 関東学院大学人間共生学部

本稿では従属変数に関する回帰分析および自由回答の内容について報告する。

2. 「二人称の死」とデジタル遺品

哲学者のジャンケレヴィッチは、死を人称で区別して論じ、自分以外の他者の死を「二人称の死」と「三人称の死」として区別した[7]。二人称の死は、近親者の死であり、具体的で感情を伴うものであるが、三人称の死は抽象化され一般化された無名の死であるとされた。二人称の死はその相手だけでなく相手との関係を失うものであるとも考察される[8]。さらに、二人称の死においては親しさゆえに故人が「そこにいるように」感じるものでもあり得るという指摘がある。実藤佐々木の論考では、医師でもある著者自身が亡き父に対する感情の経緯を綴りつつ、生前の故人との関係性が途絶することを「関係性の死」とし、その受容は故人との新たな関係性の構築によって成立しようとしている[9]。また、そうした「死」に対する見方は年齢や経験によって変化するものであり、若い頃は死が無縁であるものの、年齢を重ねるにつれ死が他人事ではなくなるとも指摘している。

若年層である大学生に対して、「二人称の死」とされる家族・友人の死後に遺されたものの扱いについて聞いた2018年の調査では、一般的な写真や遺品の扱いについて聞いたところ、「長く残しておきたい」「大切なものである」（いずれも68.3%）が最多であり、「懐かしくなる」（56.3%）、「たまに眺めたい」（45.0%）が続いた。「滅多に眺めることはない」は3.3%と少数であり、処分したいという回答は得られなかった。また、デジタル遺品についても遺したいという意向は「写真データ」（71.4%）、「電子メール」「LINEの記録」（37.5%）、スマートフォンのデータ（28.6%）、パソコンのデータ（18.2%）、SNSのアカウント（19.4%）であり、遺したい意向を示した回答者は自身のデータよりいずれも多数であった[10]。

では、遺されたデータは、デジタル遺品として適切に扱われるのだろうか。Kasketは、デジタル遺品は誰が責任を持つか不明確であり、管理する倫理規定もトレーニングもなされていない上、データを保存する企業は永続的ではないと指摘する[11]。データ保存のコストを理由にデータが捨てられる可能性があることや、企業自体が倒産することもあり得るため、故人からの画像や手紙は現在保管されている場所からダウンロードしない限りアクセスできなくなり、印刷された写真や紙の方が残る可能性があるということである。さらに、悲しみには個人差があることから、故人のデータはある人にとっては必要なものであっても、別の人にとっては目にするこすら辛い可能性もあるとしている。

3. 調査

3.1 調査の目的と概要

実際に近親者が亡くなった際、残された写真やSNS等のアカウントやデータはどのように扱われるのか、どう向かい合われるのかについて2020年1月以降に近親者を亡くされた方を対象に、死後残されたアカウントやデータに関する調査を実施した。調査実施の概要は表1の通りである。性別および20～70代の年代によって均等割り付けした上で回答を収集した上で、最近亡くされた近親者として「ペット」bや「知人」と書かれた回答を除外し、1,303件の有効回答を得た。設問では、回答者の年代、性別、サービス利用状況と宗教に対する意向といった属性と、独立変数として(1)故人との続柄(2)葬儀参列の有無(3)故人との同居の有無を聞いた。さらに、従属変数となる(A)故人が遺したアカウントの扱い、(B)故人が遺したデータへの意向、(C)故人が遺したデータの加工の意向を聞いた。全体の集計およびクロス分析の結果は、既に[6]にて報告している。本稿では、回帰分析と、自由記述を中心とした分析を報告する。

表1 調査実施概要

対象	マクロミル ネットモニター 2020年1月以降に近親者を亡くされた方
有効回答	1303件(男性 636 女性 667)
割付	性別・年代(20-70代)によって均等割り付け
方法	オンラインアンケート
実施期間	2022年1月28日

3.2 結果

3.2.1 同居と葬式参列

対象となった親族と同居していたと回答したのは11.6%であり、大半は同居していなかった。また、72.0%が葬式に出席・参列し、25.5%は出席・参列しなかった。なお、2.6%はまだ葬式があげられていない状況であった。

3.2.2 データの扱いについて

故人が遺したデータとして「故人が写った写真」「故人が撮影した写真」「故人とのチャット」「故人による投稿」をどう扱うかという問について、データが遺されていないという回答を除外した上で、「保存したい」という回答（そのまま／近親者のみが見られる／自分だけが見られる）、わからない、削除したい、の順に順序尺度とした上で、「宗教との関わり」「年代」「性別」という回答者に関わる項目と「故人との同居」「葬儀参列」という故人との関わる項目を独立変数として、回帰分析を行った。

「故人が写った写真」について有意な影響($p<.01$)を与えて

b ペットが家族の一員であるという認識を否定しないが、故「人」がオンラインサービスを使っていたかを聞く調査であるために除外した。

いたのは「葬儀参列」(標準化係数 0.232)のみであった。「故人が撮影した写真」「故人とのチャット」「故人による投稿」について有意な影響($p<.01$)を与えていたのは「年代」と「葬儀参列」であった。標準化係数は、「故人が撮影した写真」では「年代」(-0.123)「葬儀参列」(0.222)と、葬儀参列の影響の方が大きい、「故人とのチャット」では「年代」(-0.248)「葬儀参列」(0.216)、「故人による投稿」では「年代」(-0.248)と「葬儀参列」(0.188)であり、年代の影響の方が大きい。また年代は負の係数であり、若いほどデータを残す意向があるということになる。

3.2.3 データとの向き合いについて

故人が遺したデータとして「故人が写った写真」「故人が撮影した写真」「故人とのチャット」「故人による投稿」とどのように向き合っているかという問について、よく見ている/時折見ている/今は見えていないが今後見るかもしれない/今後一切見たくない、の順に順序尺度とした上で、「宗教との関わり」「年代」「性別」という回答者に関わる項目と「故人との同居」「葬儀参列」という故人との関わり項目を独立変数として、回帰分析を行った。

「故人が写った写真」および「故人が撮影した写真」について有意な影響($p<.01$)を与えていたのは「故人との同居」(標準化係数)と「葬儀参列」であった。標準化係数は、「故人が写った写真」では「同居」(0.296)「葬儀参列」(0.126)「故人が撮影した写真」では「同居」(0.253)「葬儀参列」(0.106)であり、いずれも同居の影響の方が大きく、かつ同居していたり葬儀に参列していたりするほど残す意向があることになる。

「故人とのチャット」および「故人による投稿」について有意な影響($p<.01$)を与えていたのは「年代」と「故人との同居」であった。標準化係数は、「故人とのチャット」では「年代」(-0.203)、「同居」(0.258)、「故人による投稿」では「年代」(-0.191)、「同居」(0.280)であり、いずれも同居の影響の方が大きく、かつ若いほど残す意向があることになる。

3.2.4 自由記述コメントの傾向と属性

「残されたデータやモノが無い」という回答 225 件(全体の 17.2%)を除いた残り 1078 件(82.7%)を対象に、「思い出になる」「見返す」と肯定的に捉えている回答(58.3%)、「消したい」「見たくない」と否定的に捉えている回答(6.4%)、「特になし」「わからない」という回答(35.3%)に分類した。

同居の有無、宗教観において有意な差はみられなかったが、性別でのクロス集計では、「肯定的」な回答は女性(63.2%)が男性(53.0%)より有意に多く、「特になし」では男性(40.9%)が女性(30.2%)より有意に多かった($p<.01$)。

続柄とのクロス集計の結果では、有意差がみられた($p<.01$)。その結果を表 2 に示す。太字は、その続柄のうち最も割合が高かったものである。妻(100%)、夫(84.6%)は肯定的なコメン

トの割合が多数を占めた。一方、兄姉(11.5%)、弟妹(10.3%)、いとこ(14.3%)では否定的なコメントが 10%以上であり他の続柄に比べて多かった。義父母(50.9%)、義兄弟(70.3%)といった姻族では、「特になし」が最多を占めた。

3.2.5 自由記述コメントの傾向とデータ加工意向

故人が遺したデータに手を加えるかどうかとのクロス集計では、「故人が書いた文章に何かを追加する」「故人が撮った写真に何かを追加する」「故人が写っている写真を加工する」「故人について情報をまとめる」では有意差がみられ($p<.01$)、肯定的にとらえている回答者は加工の意向があり、否定的にとらえている回答者には加工の意向はみられなかった。

表 2 自由記述の肯定・否定傾向と続柄のクロス結果

	肯定的	特になし	否定的
祖父母(N=315)	70.5%	26.0%	3.5%
叔父叔母(N=185)	51.4%	41.1%	7.6%
父母(N=163)	62.2%	30.2%	7.6%
義父母(N=57)	43.9%	50.9%	5.3%
兄姉(N=52)	53.8%	34.6%	11.5%
義兄弟(N=37)	21.6%	70.3%	8.1%
弟妹(N=29)	48.3%	41.4%	10.3%
息子(N=3)	66.7%	33.3%	0.0%
娘(N=4)	0.0%	100.0%	0.0%
夫(N=13)	84.6%	7.7%	7.7%
妻(N=4)	100.0%	0.0%	0.0%
いとこ(N=28)	39.3%	46.4%	14.3%
その他(N=89)	50.6%	44.9%	4.5%

3.2.6 自由記述コメント

自由記述のコメントのうち、肯定的あるいは否定的な傾向が明確かつ具体的である抜粋し、表 3 と表 4 に示す。いずれも書かれたままで誤字や表現の修正はしていない。

肯定的なコメントでは、故人や故人との思い出を振り返ったり、故人の生きた証として捉えたりしているものが多数を占めており、「継続する絆」を意識させるものであった。また、他の家族に残すデータとして残すべきとしているコメントもみられた。

否定的なコメントでは、故人の意思やプライバシーを慮ったものや、廃棄・削除した方がよいというもの、辛くて見られないといったものがみられた。また、故人との関係性がよくないことや希薄であることに言及しているコメントもみられた。

なお、肯定的でも否定的でもないコメントは義理の関係において多く見られ、「(義姉) どうなっているかわからない」(70代・男性)「(義母) 同居もしておらず、詳細な実態は判らない」(60代・女性)など、データ自体の存在がわか

らないといった回答が多くみられた。

表 3 肯定的なコメント (抜粋)

続柄	コメント	回答者属性
祖父母	どのような内容も、祖父が生きた証として大切にしたい物。感じたことや、その日見たものがわかる、思い出としてこれから先も大切にしたい。	20代・女性
祖父母	紙の写真のアルバムや年賀状、手紙と同じように保存しておきたい時々見返して思い出を振り返りたいもの。	20代・女性
祖父母	生きていた頃の元気な思い出を思い出す時間	30代・女性
祖父母	祖父が残した大切な思い出を家族と共有することで普段なかなか会うことのない家族が共通の話題で会話をする。皆を仲を良くしてくれているような気がします。	40代・女性
叔父叔母	とても思い出入れのある思い出。一緒に出かけた宝もの	20代・女性
叔父叔母	遠慮があつて言いたうことができなかった本心をする手がかかり。ひとりの女性としての故人をする手がかかり	40代・女性
叔父叔母	故人の思い出入れがあるものなので無にすることはほかれるもの。こちらにとっても思い出のものは少しとおきたい。	50代・女性
叔父叔母	時折観覧して故人を偲んでいる	60代・男性
父母	その人の性格が出る物。見ると色々な出来事を思い出す物	30代・男性
父母	父の目で見て来たものだったり、するので削除出来ない。見たいときは残された家族が見れるようにデータは残しておきたい。	30代・男性
父母	故人の興味のあったもの、大事にしたいと思ったもの、何でも日常の一コマであるので、これらを通じて故人の気持ちや考えをめぐらせるツールとなるので、大事にそのまましておきたい。	30代・女性
父母	生前にどのように過ごしていたか、自分とどのような会話をしていたのか思い出して読み返す。	30代・女性
父母	見ると泣けてくるが、いつか良い思い出になると思うので、自分が死ぬまで大切に保存したい	50代・女性
父母	私にとって、唯一逢うことができるものであり、生きがいでもある。データを消すことは絶対にできない。	50代・男性
父母	かけがえのない資料なので、引き続き大事にしまっていきたいと思っています。時折出して、故人をしのびたいです。	70代・男性
父母	写真は毎日拝んでいる。	70代・男性
義父母	直接の家族には大事な思い出でそれ以外の人には良い思い出の一つ	40代・男性
夫	主に写真しかないが、良い思い出になっている。	60代・女性
夫	今は削除したくない大切な遺品	60代・女性
妻	大切に思い出として向き合い時に親族とも写真を共通している。息子とはいつでも話題を共有し、淋しさを癒している。法事等で親族と話し、在りし日を懐かしんでいます。	70代・男性
兄姉	写真はSDカードに保存してある、先祖代々の写真もスキャナーで読み込み、SDカードに保存して、仏壇においてある。	70代・男性
兄姉	故人との思い出を振り返れるもの。	70代・男性
兄姉	個人の家族に寄与出来るデータは、何かの役立つものとしてその家族に全面譲渡したい財産であると考えている。	70代・男性
弟妹	この世にはいなくても生きていた証で、悲しくなるけど、温かく包み込んでくれるものです。	30代・女性
弟妹	自分宛ての物は出来れば残して、時々見たい。	70代・女性
義兄弟	機会があったら見てみたい	60代・男性
息子	生きていたことを実感できる証	30代・女性

表 4 否定的なコメント (抜粋)

叔父叔母	大嫌いだっから記憶からも消したい	20代・男性
叔父叔母	LINEなどは故人だけではなく相手のプライバシーもあるため見るべきではないと思う。写真は世の中に出しているものだけを遺品として譲り受け、公開されていないものは故人を尊重して手にするべきではない。	30代・女性
叔父叔母	他人の個人情報だから触れたくない。	30代・男性
叔父叔母	特に気にするほどのものではない。むしろ見たくない気がする。印象が変わりそう	30代・女性
叔父叔母	プライバシー保護の観点から見えない	40代・女性
父母	未だ振り返れないもの	40代・女性
父母	本人の意思がわからないので、公開はあまりできない	40代・女性
父母	知らないでいい、知らないでよいもの。	40代・女性
父母	特段の思いもない。今後自分が死んだあとを考えると廃棄した方が良くも思っている。	50代・女性
父母	少し残して、あとは処分する 孫の代まで残しておかない 写真はほとんど見なくなる。写真よりも心の中の思い出にする	50代・女性
父母	知りたくない情報	60代・男性
義父母	自身には必要ないが削除するには抵抗があります。しばらく時間を置いて削除したい。	60代・男性
兄姉	見てはいけないもの	50代・男性
兄姉	まだ見られない。三年後位かな？	70代・男性
兄姉	故人のプライバシーなので触れたくない。	70代・男性
弟妹	何を残されても必要だとは思ってなく、自分もそろそろ年齢的にデータを処分したいと思っています	50代・女性
弟妹	とても 辛くて まだ 見れない	60代・女性
義兄弟	それほど近い関係でない。	70代・男性

3.3 考察

故人が写った写真については、「残したい」という意向と「よく見る」という意向の両方において、葬儀の参列の影響がみられ、特に「よく見る」では、同居がより影響を及ぼしていた。故人が撮影した写真については、葬儀の参列に加えて、より若い年代ほど残す方向での影響がみられた。「よく見る」では、故人が写った写真と同様であった。

チャットと投稿というデジタルデータに関しては、葬儀参列や同居に加えて、若い年代であることの影響がより大きくみられた。日常生活やコミュニケーションの多くをデジタルデバイスによって行っている世代であるほど、チャット(会話)や投稿が当然のものとして感じられたり、デバイスの操作を苦勞なく行えるといったことが理由として考えられるだろう。

なお、葬儀の参列については、回答者の7割が参列していたものの、コロナ禍において葬儀をすることができなかつたり、あるいはごく近親者に限る傾向があり[5]、こうしたことが写真やデータの扱いや向き合い方にも影響を及ぼす可能性もあることが示唆された。

写真やデータの扱いや向き合いに対する自由記述回答では、一親等、二親等では肯定的な回答が大半を占めた一方で、義理の関係では「特になし」が多く、また兄弟姉妹やいとこといった、同世代の近親者については「否定的」がそれ以外の続柄に比べて多い結果になった。年長者が先に死ぬことはやむを得ないとしても、自分と同世代の親類が死ぬことにつ

いてはより大きなショックや悲嘆の感情が続いている可能性もある。実際、兄弟姉妹についての否定的なコメントでは故人のプライバシーへの懸念や、見ることへの苦痛が具体的に書かれていた。

4. おわりに

本稿では、2020年からのコロナ禍において、実際に近親者との死別を経験した人たちを対象とした調査結果から、どのような要因が死後遺された写真やデータの扱いや向き合い方に影響するのか、どう感じられているのかを考察した。ワクチンの普及や治療薬の開発によって、新型コロナウイルス感染症による社会への影響が徐々に減じられつつあるとはいえ、死の間際に立ち会うことや、葬儀を行うことがかなわない状況はまだ残っている。

こうした社会状況を鑑みつつも、遺族にとってどのようにデータを残したり向き合ったりすることが求められるのか、引き続き検討する。

謝辞 本研究は、科研費基盤 C「パンデミック下における個人の死後データ継承(22K12724)および科研費基盤 B「情報ネットワーク社会における『死』の再定義」(19H04426)の研究成果の一部である。またアンケートにご協力いただいた方に感謝の意を表する。

参考文献

- [1] 伊勢田篤史,古田雄介. デジタル遺品の探しかた・しまいかた,残しかた+隠しかた~身内が亡くなったときのスマホ・パソコン・SNS・ネット証券・暗号資産等への対応や,デジタル終活がわかる本. 日本加除出版. 2021
- [2] 古田雄介. スマホの中身も「遺品」です: デジタル相続入門. 中公新書ラクレ.2020
- [3] 北川祥一. デジタル遺産の法律実務 Q&A. 日本加除出版.2020
- [4] 厚生労働省・経済産業省. 新型コロナウイルス感染症により亡くなられた方及びその疑いがある方の処置,搬送,葬儀,火葬等に関するガイドライン (令和2年7月29日第1版) 2020 <https://www.mhlw.go.jp/content/000653447.pdf> (2022-11-30 参照)
- [5] 鎌倉新書. 第5回お葬式に関する全国調査 (2022年) 2022 <https://www.e-sogi.com/guide/46028/> (2022-11-30 参照)
- [6] 折田明子. “故人のデジタル遺品にどう対処したか: 近親者を亡くした方への調査から” 情報処理学会第192回DPS第97回EIP研究会報告 2022-EIP-97 (3), 2022
- [7] V.ジャンケレヴィッチ (仲澤紀雄訳). 死. みすず書房 1978
- [8] 芹沢俊介. 経験としての死~死の講義I. 雲母書房 2003
- [9] 佐々木恵雲. “死とは-新しい概念としての「関係性の死」の意義-” 藍野学院紀要, 23. 2010
- [10] 折田 明子, 湯淺 壘道. 死後のデータを残すか消すか?: 追悼とプライバシーに関する一考察.情報処理学会論文誌, Vol.61, No.4, pp.1023-1029.2020
- [11] Kasket,E. “Chapter 2 Social Media and Digital Afterlife “. Maggi Savin-Baden, Victoria Mason-Robbie: Digital Afterlife Chapman & Hall/CRC Artificial Intelligence and Robotics Series CRC Press,2020